

# 哲學研究

第三百三十一號

第二十八卷  
第十冊

## 身體性の構造

下程 勇吉

### 一

生物體と外界一般との境界を成すものは皮膚である——これは認識論者のみならず生理學者からもしばしば笑殺せられた常識的命題にほかならない。人々は直ちに生物とその環境との間に存在する所謂非決定帶の事實を指摘するであらう。生物體の内界と外的環境とは透過すべからざる絶壁をもつて隔絶せられてゐるのではない。生命はつねに内外相貫的である。生命はどこからはいりどこに終るといふ如き一義的限界をもつてゐない。ことに外界を物理的機械的自然と考へ、内界を目的論的生氣論的統一となすが如き二元論的立場は根本的に誤であ

る。物理的環境のみより生命現象を考へんとする機械觀的主張のみならず、環境より獨立なる生氣論的原理より生命を説かんとする主張をも併せ斥ける生物哲學的立場において、「生命には内外の空間的限界はない」といはれるのは當然であらう。生命現象においては内外相貫的である。内外の境界は一義的に成立するものではない。それは時に内の方向に、時に外の方向に動搖するのである。生命においては弾性的内外相貫性が支配的である。このことはあらゆる生理現象の事實が端的にあらはすところである。所謂外的刺戟はつねに一定の値にとどまる恒常者ではない。外的刺戟はつねに内的反應と相關的に様々なる意味をもつてあらはれるのである。外なるもの

は内に入り込むと共に、新しい意味を荷つてまた外に投射せられるのである。内と外とは柔軟なる有意味性において相互に關係し相互に滲透してゐる。その限り、皮膚において生命の内外の境を見ようとする常識的見解は、事實をとらへたものではないといはれよう。しかし問題はむしろこれから先にあるのである。

## 二

生命においてはつねに内外相即的である。生命は本質的に有機體の外界に對する不斷の調整作用であり、内外の動的均衡の維持作用である。かゝる生命の發生地盤乃至環境の性格は如何なるものであらうか。生命に關して生氣論の原理乃至無規定的創造的進化を説く内在的立場は、生命の本質を十分理解せしめるものではない。生命そのものがその環境と相關のあり内外相即的統一を成す以上、生命の具體的性格は環境の規定をはなれては理解せられない。生命現象はその環境の性格に深く影響せられ、それと相即的である。生命が内外相即的に環境と動的平衡を保つものである限り、生命の本質的性格がその發生地盤乃至その環境の性格と相照應するものをもつ

は當然といはれよう。

生命の發生地盤は何處に求められるであらうか。生物學者地質學者生化學者等は原始生命の發生したところは水ことに海洋においてであると考へてゐる。この點に關して、萬物の根源を水に求めるターレス的命題は——もとより *mutatis mutandis* に——我々にとつても示唆的であるといはれる。生物發生を論ずる學者が宇宙進化史において水の發生を重大視するは、由なきことではないであらう。發生學によれば、人類においても胎兒の或る時期に鰓弓 (*Gill arch*) が現れ又消える。この系統發生を物語る個體發生的事實は人間進化の跡が水棲生活に關係してゐたことを物語ると解せられてゐる。化石學者は最古の水成岩層に現れる動植物の痕跡遺跡はすべて海産の生物に關係してゐることを指摘してゐる。種々の方面よりして原始生命の發生環境は海洋であると考へられてゐる。

生命と水との關係は實に深密である。人體の如きは體内の水分を一割失へばその生命危殆に瀕し、二割近くまで水分を失へば死に襲はれるといはれてゐる。生物體は膠質に満ちたる液狀體の容器であるときへ呼ばれてゐる。

水は多くの營養物質の溶媒として自然界において無比の位置を占めてゐる。水は無水炭酸と並んで生命現象を可能にする根源的條件を成すと、生化学者が高調する所以である。直接に水を環境とする水棲動物のみならず、陸棲動物もその内部においてその細胞の生命を何よりも先づ水に負うてゐる。有機體の内部環境を形成する中心要素は水である。表面張力大にして化學的安定性に富む水こそは、生命に必須なる諸物質の溶媒として最もすぐれたものといはれるのみならず、體内に生じた老廢物を排出する媒體としても最適物質である。生物體の生命を可能にする新陳代謝作用の媒體として無比の位置を占める水は、生命そのものを哺み來る根源的環境にほかならぬ。ことに海洋の生物發生に對する役割は重大である。

### 三

海洋は驚くべき多種多様の物質を溶かして湛へてゐる。淡水や陸上においては、時として斷食絶食を避け得ぬが、海中では恒常的に食物が保證せられてゐる。生命に必要な要素を殆んど全部しかも常住含んでゐる海洋くらゐ、生命の發生と維持とに好都合な環境はないと、いはれて

ゐる。かくて幾多の地質學的變化にもかゝらず、「生命の起源は恐らく原形質の形成に必要なあらゆる物質を溶液の形で含む海洋において行はれたのであらう」と考へられるのである。しかし如何に多く必要な物質や食物を含有してゐても、それが一所に偏在してゐるところでは、あらゆる原始生命の一般的环境は興へられないであらう。しかるに海洋はつねに圓環運動によりて動的に一樣性を保つ環境にほかならない。海洋においてはいたるところ暖寒二流が相交錯して上下圓環運動を成してゐる。かゝる海流の圓環運動は生命に必要な可溶物質をあらゆる所に遍在せしめる。それのみではない。海水の循環運動はまた鹽分の濃度・アルカリ度・溫度・滲透壓等の恒常性をも可能にする。ことに生物體に直接に甚大な影響を興へる溫度の激變なき環境として、海洋は生物發生のみならずその生命維持に好個なる條件を具してゐる。動性そのものうちにたえず恒常性を實現してゐる海洋こそは、まさしく生命發生の母胎であり環境である。かかる海洋の性格規定は、またそこに發生した生物體そのものの性格に深く流れ込み、後に詳論するが如く、生物の所謂内的環境は動性自體のうちに恒常性を實現すると

いふ性格を獨自な相の下に享有してゐる。

要之、海洋くらゐ安定した物化學的條件をそなへ豊富多様な營養物質を宿した環境は他にあり得ないといはれる。生命發生の見地よりして無比の母胎である海洋は同時に亦生命にとつて無上の媒養基である。ことにコロイド組織を不可欠とし、溫度の一定性を何等かの意味で必要とする生物體にとつて、滲透壓と溫度との恒常性を併せ保證する海こそは、原始生命には無比の好適環境であつたといはねばならない。滲透壓・溫度・アルカリ度・濃度等のかくも大規模にして恒常的なる調整は、宇宙進化史において海洋にのみ展開せられたのであつた。生命の新陳代謝現象に不可欠の水と炭酸のみならず多様な溶解物質を含有し、しかも物化的條件の恒常性を大規模に實現した海洋こそは、原始生命發祥の環境であつた。かくの如き海洋の性格は、そこに生れ出た生物體一般の構造そのものに反映してゐるが、ことに下級原始生命においてはその外的環境（即ち海水）とその内的環境（即ち體腔液）との構造は極めて親近的類比的であり、ほとんど内容的に直接的連続性をもつとさへ考へられる。海中の原始生物の體腔液はその組成において殆んど海水に

一致してゐる。また他の進化せる淡水生物や陸棲動物においても血液と海水との類比的組成構造が指摘せられてゐる。これらのことは生命の原始的發生環境が海洋であつたことを思はしめるものである。更に以下述べる如く、原始生命環境たる海洋を離れた高等動物はその本質構造として内的環境の「動的恒常性」といふ規定を荷つてゐるが、この規定こそは直接的ながらもまさしく海洋自身の性格でもあつたのである。

註 本項の敘述に資するところがあつた主要文獻は次の如くである。L. J. Henderson, *The Fitness of the Environment*; A. S. Peruse, *Environment and Life: Migrations of Animals from Sea to Land* 等

#### 四

海洋は原始生命を哺んだ根源的環境であつたと説く生物學者の見解は、生命の本質構造を考へる我々にとつても示唆的である。海中に住む下級動物の體腔液の組成はほとんど海水と同じである。そこでは海水と細胞生命とは殆んど直接に交通してゐる。しかしいかなる海中の生物においても海水即ち生命ではあり得ないのである。すな

は海中がいかに生物體そのものに深い關係をもつにせよ、海水はあくまで生命の環境であり所謂「外的環境」なのである。そこにはすでに何等かの意味で生命の環境に對する獨立性が見られるのである。最初の原始生物においては、その體腔液は殆んど海水と直接自由に海水が出入し、その體腔液は殆んど海水と等質性をもつといはれながら、かゝる生物體もすでに何等かの意味で海水と自己の内界とを分つ隔膜をもち、それによつて海水の出入を一定の方向においてある程度ながら調整してゐる。

幾分でも進化した生物になると、體腔液と海水との直接交通は遮断せられ、體腔液が海水の代用をなし、こゝに外的環境に對する所謂「内的環境」の獨立化が行はれ、内的環境としての體液はますます複雑となり、そこに生命の環境に對する獨立性乃至非連續性がますますつきり出て來るのである。かゝる生命の獨立性をあらはし生命の内外環境の區別を感性的に標示するものが、所謂外皮にほかならない。その限りにおいて、生命と外界との區別を皮膚において認めんとする常識の見解も素朴的ながら盾の一面を見てゐるといはれよう。進化せる生物は非滲透的な外膜をそなへ、重要器官を保護する外骨格を

もつてゐる。かゝる外壁の中に一定の内的環境を恒常的に維持しよく外的變化に耐へ得る内的獨立性が高まるほど、生物は高次の進化を遂げたと稱せられるのである。内的環境の獨立性の高度化こそ、所謂生物進化の標識を成すと考へられてゐる。

無生物は全く外界の制約に従ひ外界と直接に連続しそれと云はゞ靜的平衡を保つてゐる。その限り無機界においては、内外環境の別は語るべくもない。下級生物であるほどかゝる自然に對する直接的連續性は顯著である。

それに反し高等生物になるほど外界より獨立的なる「内的環境」が複雑なる體制において成立し所謂自發性が高度化し内外環境が動的平衡を顯現し來るのである。下級生物では内外の連續性が支配的であり、高等動物では内外の對立性が顯著である。このことを明かに示すものは、生物學者の所謂「動物の海より陸への移行」現象に併行する血液乃至體液の複雑化の事實である。生物が海中より淡水に又は陸上に移行するにつれて、血液は獨自の組成を示し體制は複雑化し所謂内的環境が確立せられるに至つたのである。既述の如く、海に棲む生物にはその生活環境は比較的安定しその食物は殆んど常に保證せら

れてゐる。しかし淡水更にはことに陸地においては外的生活環境はたえず變化し斷食の機會は決して少くないのである。例へば溫度の變化の如きも、海中においては $-28.0^{\circ}\text{C}$ より $+31^{\circ}\text{C}$ に至る $33.8^{\circ}\text{C}$ の範圍内に止まるが、陸地におきては $-30^{\circ}\text{C}$ より $+65^{\circ}\text{C}$ に至る $15.5^{\circ}\text{C}$ に及びとさへいはれてゐる。(ベースに依る。)かく陸上においては溫度の變化が大であり急激であるのみならず、呼吸作用の如きも、海中の方が淡水の中や陸地よりもはるかに容易である。海は等質安定の環境であり、陸は凸凹不定の環境である。かく頼むべからざる外的環境において生きる生物は勢ひ内的環境の恒常性をたのむほかはなくなのである。困難なる環境の不安定性に順應するに複雑なる内的環境の恒常性をもつてするところに、所謂生物進化の現象が語られるといへよう。生物進化の歴史は現象的には海より陸への移行變遷に反映してゐる。かゝる移行の現象に注目するとき、生物進化の歴史が生物の外部環境よりの獨立性の展開であり内的環境確立の歴史であることが知られるのである。

安定せる環境としての海洋に棲む生物の中ことに原始動物の體腔液はほとんど海水と等質的であるが、淡水動

物の體液はその外界の媒質とその鹹度やその組成を相當の程度において異にし、陸棲動物にいたればこの傾向はいよいよ顯著である。即ち海より淡水、更には陸地に移行するにつれて、生物體の「封鎖的組織性」closed systemは高度化せられ、こゝに所謂生物進化の跡が辿られるのである。生物學者が語る如く、動物にして體内の鹽分その他の脱出を防ぐ外殼組織なくしては淡水に移住することは不可能であつたであらうし、體内に水分その他の内的恒常性を保つ生理學的機能なき動物は陸上に移り得なかつたであらう。外皮に標示せられる生物の環境に對する獨立性を實的に保證するものは、所謂内的環境として血液乃至體液の恒常性にほかならない。直接的に外界に依存し得る原始海棲動物と異りて、不安定なる外的環境に直面せざるを得ぬ淡水動物乃至陸棲動物は自己の生存を自己の體内の一定の機能統一としての内的環境に托するのほかはなかつたのである。海洋におけるが如く外的環境が直ちに内的環境を保證するが如きところでは、生命は安定ではあるが「進化」の度は低い。内外對立の境位において外界の不安定に對するに内的なる「封鎖的組織」を以てする生物たるに及んで、生命は大なる躍進を

成したといはれる。このことは陸地より再び海に歸れる動物等を含めて海洋における種々なる動物そのものにも *mutatis mutandis* に妥當するであらうが、一般に動物は海より淡水更には陸上に移行するにつれて、内的環境の恒常性を確立するにいたつたのである。一般的にいって、多くの海産無脊椎動物の血液は殆んど海洋と同じやうなものが多いが、脊椎動物の血液物質は海水とある種の類比性を示しながらその環境の媒質とは異なる獨自な組成をもつてゐる。かゝる洞察に導かれて、生物學者は生物進化の歴史を「海水の變貌」としての血液の歴史として讀みとらうとしてゐる。生物の海より陸への移行を具さに跡つけたパースの生物學的結論ともいふべきものは、次の數行に窺はれるであらう。「動物は漸次に海水から淡水へと、更に陸上動物へとかはつて行つたのであるが、それにつれて、體液は海水と同様なものから、比較的に稀薄な・確實に調整された・ねばねばした・營養に富み・血球を含み・色素のある體液に變化した。……陸上動物與陸の歴史は血の歴史であつた。即ち頼りになる原始的な外部媒質への倚頼から、特殊化され高度に調節された内部媒質への倚頼へと、重點が移つたのである。」

(Migrations etc.)  
邦譯一六頁

## 五

安定せる環境に對してより、直接的なる連續性をもつものが下級動物であるに對し、高等動物は不安定なる環境に對處するに内的環境の恒常性を以てする主體として獨立的である。高等動物になるほど體制は複雑であり、その内的恒常性は高度化せられ、その外的環境に對する獨立性は顯著となる。このことは、動物の海より陸への移行現象において明かに窺はれるところであつた。安定せる海中生活をすてゝ激しい變化に富む不安定な陸上生活に移るとき、動物は内的環境の恒常性によりて環境との動的平衡に入り得たのである。かかる内的恒常性の最大なるものは、血液元素の彈性的恒常性であり、更には體温その他のそれである。この點の立入つての考察は以下の敘述に屬するが、體温の恒常性も生物進化史において注目すべき位置をしめてゐる。等温性も亦生物進化の一要因でありまたその一標識を成してゐる。冷血(變温)動物においては、外界の温度の上下によりて體温が左右せられ、體温調節の機能が發達してゐない。それに對し、

温血(定温)動物においては、急速なる物質代謝作用と體温調節作用とが發達し、外界の温度の變化より獨立な體温の恒常性が維持せられてゐる。すなはち等温性は變温動物が棲息し得ぬ寒冷酷暑の地にも食物さへあれば動物や人間を棲めるやうにしたのであつた。かくて等温性も亦生命の外的環境よりの獨立性を進める一因子となつたのである。生物學者が指適するが如く、鳥類と並んで哺乳類が等温動物として陸上の生活をなし得ることは、腦の發達に深い關係をもつてゐるのであるが、等温の現象においても内的環境の恒常性が一方において外的環境よりの獨立性を可能にすると共に、それが直ちにより、廣範圍の環境への順應性を可能にしたのである。動物は等温性によりて特殊のなる外界規定より獨立になることそのことにおいてより、廣くより、深く自然につながり得るのである。こゝに生物の獨立性の注目すべき姿があるのである。直接に外界につらなる内界をもつ生物は、その種的個性が明かならぬ下級動物である。外的環境より獨立的であればあるほど、生物はその種的個性を明確に浮彫りにする。外的環境よりの獨立性を可能にする内的環境の恒常性は、對他的には種的個性を鮮かにあらはし出すの

である。しかも外的環境よりの獨立性は單なる自己領域的隔離性を意味せずして、却つてより深く廣き次元において自然につながる媒介性を意味する。一應外界より獨立的になること自體のうちにより、深く廣く豊かなる次元において自然とつながるものが、進化せる高等生物にほかならない。かゝる媒介的構造性こそは、複雑なる内的機構をもつ高等生物生命の核心を成してゐる。生物體の成立そのものにおいてすでに内包的集中性と外延的包攝性との相即統一として種的中心が見られるのである。その意味では、後にふれるが如く、有機的生命の次元にも種的中心性の相の下にイデア的ロゴスの規定が深くはたらいてゐるのである。

かくの如くして、複雑化せる體液の恒常性、等温の維持、物質代謝の高等化等は、外界の變動性に抗して所謂「内的環境」の獨立性を確保し、所謂生命の進化を可能にし、種的個性を浮彫りにするのである。生物はその體制が複雑化し高級となるだけ、外的環境に對する非連續的獨立性が内的環境の恒常性と表裏相即的に確保せられ、こゝに生命の種的形相の統一性がまぎれもなくあらはれるのである。しかしながらこのことは所謂生氣論的立場



の主張乃至是認を意味するものではない。生命現象の中核を成す所謂内的環境を支配するものは、物化學的機械論の規定より獨立なる生氣論的原理ではあり得ない。既述せる如く、機械論と生氣論とを對立的に考へこれを外的環境と内的環境とに配置するが如き二元論は、根本的に誤である。クロード・ベルナルが極力高調するが加く、生物の内外兩環境を現象的に支配するものは唯一つの *déterminisme* 以外の何ものでもない。生理現象を説明する超越的の生氣論的原理なるものはあり得ない。最も進化せる生物は外界に對するより完全なる獨立性そのものを、外界とより深く廣く豊かなる次元において自由に通する分化せる統一的生體機構そのものに、負うてゐる。外界に對する生物の非連續的獨立性はいはゞ無の非連續性にほかならない。こゝでは非連續的獨立性と内包的全體性とは表裏相即してゐるのである。生物體の非連續的中心性は生物體のうちに集約せられたり、廣く深き次元の自然規定性と相即する。生物の中心が高まり深まるだけ、自然はより廣く、より深く生物體のなかに入り込んで來るのである。進化せる生物の體制乃至内的環境は、媒介的に實現せられた存在濃度の高まりにおいて成

### 身體性の構造

立するといへよう。かゝる内包的強度的集中性と外延的包攝性との相即によりて、生物體はより多くの外的刺激に反應する「檢波器」たるの性格をもち、より深く存在に通する次元を自己のうちに開いて來るのである。

## 六

生物は高度の進化を遂げるほど外界よりの獨立性そのものにおいて全自然そのものにより、廣く深く交通するのである。下級動物はより直接的に自然に連るが、その交通の内包的外延の規定は極めて局限せられてゐる。それに反し、所謂高等動物に近づくほど、その内外調整器官は高度に發達し、その體制は複雑化し、自然との直接交通を一應排去する自己中心性においてより、深くより、全體的に自然全體に通するに至り、生體器官はますゝ中間的の聽官は直接鼓膜に合一し云はゞ觸覺的直接性を示してゐるが、高等動物になると、聽覺器官と鼓膜との間に種種なる中間器官が介入し、その聽覺機官は遠官的により精緻となつてゐる。かゝる生物進化の標識としての生物の非連續的媒介的中心性そのものは神經系の發生學的事

實よりも窺はれるであらう。體表に位置する觸覺を基本的根源感覺となすアリストテレスの見解を裏書するかの如く、神經系は外胚葉系に發生したと發生學者は説くのであるが、最初放散胚を成して身體各部に存在した神經細胞は生物の進化と共に次第に集中して管を成して體内に陥入し、身體の中軸部において脊髓管を形成し、更には——ことに頭部を前方にして運動する動物においては——次第に腦半球が發達するに及んで、神經系は内外兩環境の調整にあたる媒介器管としてその中樞化機能の完成を遂げたのである。すなはち神經系は觸覺的體表的直接性より中樞的内面的間接性に深まりゆくことにおいて、生命の内外調整機能性は高められ、内と外とはより深く廣き次元において相通じ、こゝに内外の微妙精緻を極める彈性的平衡が實現せられるに至つたのである。生物進化の歴史は、生命の外と内とをつらねる道が直線的でなく屈曲してゐることを物語つてゐる。脊髓神經管の上部が「」の字狀廻轉を成して成立した人間の大腦の形姿こそは、やがて人間においてその頂點を見出す生命進化の内奥本質の象徴的表現ともいへるであらう。精神を生命の敵對原理と見る立場に立ち大腦動物としての人間その

ものを生命進化の行き詰り乃至「袋小路」と解する論者（Vgl. M. Scheler, Mensch u. Geschichte 1929 S. 42 ff.）にとつては、大腦兩半球の側面彎曲は生命の「行き詰り」「精氣」の象徴と考へられるであらうが、生命進化の本質を内に屈曲しつゝより深く存在への道をうがち行く間接的媒介性に認める立場に立つものには、腦の形姿そのものが生命の本質構造の象徴たる意味をもつてあらう。腦の左右にふくらむ彎曲は屈しつゝ伸び下りつゝ上る生命の本質を象徴する。

海洋の原始生物の如く、安定せる外的環境に直接に融合し直線的連續性において自然と交通する生物には進化發展はない。同様に固定生活に止まる或種の生物（變温動物、フデツボの例等）の如く、外界に對して徒らに屏をとぎす自己籠域的な生物もまた進化發展しない。すなはち自然に左右せられるのみで獨立性なきものも、自己中心的なるのみで自然への道を閉ざすものも、ともに進化しないのである。それに反し、外的環境に對する内的環境の獨立性そのものにおいてより深くより全體的に自然と交通する道を開く生物こそ進化發展するものにほかならない。外的刺戟の激しさに對抗する内的環境の複雑

にして柔軟なる恒常性こそ、自然よりの獨立と自然とのより深き交通とをマース的相貌において統一する生命の内的構造にほかならない。生物進化の相を凝視するものは、自然が如何に深く生物の内部に入り込んでゐるかに驚くと共に、生物が自然の中にあつて如何に精妙なる内部環境の獨立性を確保してゐるかに感嘆するであらう。ことにはつねに「現在」に住する生命のもつ種の同一性が世界そのものゝ隨所の中心として我々の眼をうつてくるのである。今や我々の問題は、生物體ことにそのうちでも最高の位置を占めると稱せられる人間の身體に關して、「内的環境」そのものゝ構造の究明に向ふのである。

下級生物は外界の影響によつて殆んど全面的にその生活を支配せられてゐるが、高等生物は己自身の内的環境を確保し外的變化に對して自己同一性を維持してゐる。生物は進化し所謂高等になるにつれて、外的環境のよりはげしき變化に對してよく動的平衡を保ち己自身の内的環境の恒常性に住し得るに至るのである。外界との直接融合的連續性を超え、外界に對する獨立性乃至内的中心性そのものにおいて却つて外界のあらゆる契機により深くつながるやうになるところに、生物體の進化の高度化

が語られるのである。高等動物になる程、體外の不安定的環境と彈性的平衡を保つ内的環境の動的恒常性は具體化してゐる。生物はその進化の高度化と共にその體制を複雑化しその内部中心をはつきり浮び上らせるのである。無生物は外的條件と全面的に平衡しその存在する場に埋没してゐる。そこには自然の力動性の場の起伏があるのみである。生物界においては、生物が場の中心としてあらはれる。單なる空間的並存性を超え、環境の場に解消せられざる時間的中心として、つねに動的なる新陳代謝的現在性に住するものが、所謂生命にほかならない。かかる獨自なる中心性は所謂内的環境の動的恒常性において成立するが、かゝる性格は殆んど自然界に埋没してゐる下級生物において最も稀薄であり、脊椎動物ことに人間の身體においては最も顯著である。ことに人間の身體の全存在界における獨自なる位置がある。身體の精妙なる内的環境の彈性的全機性こそは人間を特定の環境制約より解放し地上のあらゆる局面に生活せしめるにいたつたのである。下級生物は特殊的环境に最もよく順應するが、それを超えてあらゆる環境に住する可塑的全機性に缺けてゐる。下級生物はその外界との直接融合性の故に

却つて狭少なる外延において自然と交通するのみであるから、その生活は内包的に貧弱である。外界に對する自立性そのものにおいて外延内包兩面に互り自然とより深き交渉に入る高等動物の頂點に、「大脳動物」としての人間が見出される。かゝる彈性的生活適應力を人間に與へる基底としての人間の「内的環境」は如何なるものであらうか。上來我々は自然そのものに殆んど埋没してゐる原始生物の體制の規定よりはじめて生物體の進化の構造を追求し來つたのであるが、今や人體の「内的環境」

そのものの本質構造の究明が我々の問題となるのである。先づ人體の内的環境の基本構造は如何なるものであらうか。如何にして人體はその有限性にもかゝはらずあらゆる環境に順應し得るであらうか。人體においてその三分の一くらゐの質量をもつにすぎない血液は循環作用によつてよく全身を養つてゐる。かく有限にしてしかも全體に通ずる所以は、血液のもつ律動的循環性でありまたその動的恒常性の故である。かゝる性格こそ人體の内部環境の本質を成すものである。生物が「動的恒常性」の性格を負ふ海に發して體內に海水を包んで陸に上り「海水の變貌」として血液をその内部環境の主要成分とする

限り、生物體の内的環境の本質は「動的恒常性」にほかならない。しかし海洋にその發生系譜をもつ生物の動的恒常性の性格は、陸において「自由に運動する生物」においては「律動的全機性」として現象的にあらはれるのである。人體の内部環境の「動的恒常性」に究明の歩をすゝめるためには、先づその現象的形相としての人體の「律動的全機性」を記述すべきであらう。

## 七

一般に生物體の機能は太陽の副射エネルギーの影響のもとにリズム的であるといはれてゐるのであるが、人體はその根本性格において勝義的に律動的であり可塑的である。身體の根本性格は硬ばつた剛直性でなくしてしなやかな律動性である。歩行・呼吸・血行・欲求衝動等すべて人體の基本的機能はいづれも皆律動的である。先づ身體運動の面からいへば、左右相稱的構造をもつ人體の四肢運動はいづれも脊柱を軸とするリズム的運動にほかならない。一切の筋肉運動も相拮抗する神経支配によつて相反相即的律動性を示してゐる。身體は外部運動の面のみならずその内部機能においてリズム的である。血行・

呼吸・消化等の諸作用をはじめ衝動生活等みな然らざるはない。年に寒暑あり、潮に干満あり、日に晝夜ある如く、人は覺醒と睡眠・饑渴と飽滿等と一上一下律動的なる衝動生活を日夜くりかへしてゐる。食欲性欲等の如き基本的衝動生活は四季天體の運行と類比的に周期的律動的波動を描いてゐる。「リズムは衝動生活を生命づける因子」と稱せらるるのも偶然ではない。

もとよりこの際「リズム」なる語は嚴密なる音樂上の用語として使用せられてゐるのではない。音樂上の所謂リズムは高次の繊細なる精神的統一作用において成立するものとして、單なる周期的現象の繰返しといふ如きものにとゞまるものではあり得ない。しかしながらかゝる音樂的リズムはまた單に「精神的」に成立するものでもない。こゝにも他の精神的なる高次の作用と同様に身體的なる基底乃至相關が存在してゐるのである。音樂的リズムの原始的基底が、時に海の波動や潮の干満等の如き自然現象に求められると共に、しばしば人體の步行運動・心臓の鼓動・呼吸・運動感覺等に求められる所以である。リズムの原始的基底は自然と類比的なる構造をもつ身體そのものゝ內的振動にもとめられる。我々の用語

もかゝる脈絡において使用せられるのである。すなはちこの際律動とは左右相稱的身體の運動に明かに窺はれるが如き對極の一圓統一性を意味する。以下更に明かになるが如く、人體はつねに對極の一圓統一運動としての律性に住してゐるのである。人體はあらゆる對立的分化の間に一圓統一のリズム的生命を無限に深める *nuno stans* に住してゐるといはれるであらう。

人體を根源的に貫いてゐるものは律動的振動體驗にほかならない。あらゆる感覺のうち最も基本的感覺として許されてゐるものは觸覺であるが、その觸覺そのものには振動體驗が深くからみ合つてゐる。(Vgl. Katz, *Aufbau der Tastwelt* S. 188 usw.) 身體はその内奥において律動の波にほかならない。原始人が踊と歌とのリズムに狂ひ興ずるは故なきことではない。歌と踊なくして原始人の生活は考へられないことよりするも、人體の根本性格がリズム的振動性において成立することが思はれるであらう。人體の祕奥に參じた藝術家ロダンが人間の身體において「肉體の音樂」を語るのも故なきことではない。

原始人の踊や歌の旋律生活からはじめて文明人の複雑

なる心理現象にいたるまで、生命のリズム的振動性は上下一貫してゐるのみならず、内外自他の共同體験の場を貫いてゐる。人間存在の根柢には情意的衝動的なる生命のリズムが共同體験的に自他を貫いてはたらいてゐる。内的テムポの律動の場が自他をひとしくゆすぶるところに、人間相互間の共感・感情移入・理解・模倣等の原始體験が成立するのである。自他相互の間に干渉しつゝたえず起伏してゐる生命のリズムの波が原始的共同體験を構成するところに、「あらゆる種類と風土の人々が打合せもしないでお互ひに理解するやうに本性上なつてゐる身振」も成立するのであらう。かゝる原始的共同表情體験としてカントのあげたものは次の如くである。肯定する際に點頭する、否定するとき頭を横に振る、反抗する際頭を上向きに反らせる、訝かるとき頭を動かす、嘲るとき鼻に小皺を寄せる、嘲り笑ふ(せゝら笑ひ)、要求が拒絶せられたときしよげた顔をする、不機嫌なとき額に皺をよせる、口をすばやく開閉する(嘲弄)、手で來いとかあちらへ行けとかの合圖をする、仰天したとき頭の上で手をたゞく、脅すとき拳を固める、身を屈めてお辭儀する、「黙つて！」といふ意味で口に指をあてる、舌打

をする等々。(Kant, Anthropologie in pragmatischer Hinsicht 299) 人種や文化の差を超えて同一なる表情・衝動體験は、直接的なる顔面表情・身振の表情音聲(喜怒哀樂恐怖憤怒等の叫聲)等に見る如く、いづれも律動的なる自己共同的原始生命體験に發してゐる。一切の存在規定を根源的に與へるものは、主客自他の構造的對立に先行する情意的律動的共同體験性にほかならない。そこには自他内外上下をゆすぶる律動的根本生命がある。何等かの意味で天地自然と律動を共にするものにして生命である。かゝる生命の律動が自他を一圓統一において生かしてゐるのである。生命の時間的律動性は直ちにその空間的社會性を意味する。リズム的に循環する生命はつねに「我と物」「他と我」との兩極の間に振動してゐるのである。欠乏と充足との兩極の間にリズム的の周期性を示す衝動や本能の原始生命體験は、直ちに物我・自己といふ空間的社會的關係を含んで成立する。最も根本的なる衝動本能としての食欲は、私の存在が如何に深く「物」に——従つて更には他我につながつてゐるかを示さずにはおかない。同様に生殖欲もまた己の存在核心が直ちに異性又は他我につながる所以を最も端的に示してゐ

る。生殖欲とそれにつながる人間の行動は異性間の最も直接なるリズム的合一性において成立してゐる。對立する兩性は相結びつゝ新らしき男女を生み出す。生むことはもつとも原始的に對立そのものの合一としての生命の共同體験的リズム性において成立するのである。既述の如く、リズムは對立の相反相即の一圓統一性にほかならない。かゝるリズムこそは根源的生命を貫くものである。對立しつゝ一圓生命を深める律動的全體性こそは、人體を貫く根本規定であり、同時にまたそれは自他相即の社會的共同體験の根本性格にほかならない。

## 八

かくて律動的全體性の波は横に（空間的社會的に共同體験性において自他の生命を貫いてゐる。それと共に、かゝる律動的全體性は縦に各個人の心的諸作用をもまた共同體験的に *intermodal* 貫いてゐる。あらゆる知覺作用は——形態心理學者が主張するが如く——力動的なる場において成立する。かゝる場において成立する限り、各、の知覺作用は場の全體の律動性を分有してその間自づと共同體験性をあらはして來る。あらゆる種別的規定

にもかゝはらず、知覺作用は根源的生命自體の場に發する力動的全體性を宿して成立する。上述の如く、根源的生命體験はその律動的全體性において自他の別をこえ人種や文化の差をもこえるが如き共同體験性を荷つてゐる。かゝる根源的體験は自他を包み自他を交通せしめると共に、各、の知覺作用の種別の共通感覺的根源を成し、所謂共同體験性において知覺相互間の意味的相即を可能にする。即ちかゝる共同體験性の地盤に立つが故に、一方では見る作用と聽く作用の如き異質的作用相互間の轉位結合が可能となり、他方では自他相互間の理解が可能となり、こゝに全き意味において語る *Logos* 的作用が成立するのである。かく自他をこえつゝしかも自他に分流することに於いて自他を交通せしめる共同生命的體験のリズム的性格は、ケラーがその所謂共同體験的體験を樂典用語を借りて *arsento*, *diminuto* 等と記述したことを想起せしめるであらう。リズム的共同體験は自他を直接の理解に達せしめる分節的全體性をもつてゐる。人はこゝで聾啞教育の方法を想起するであらう。聾啞者の一方の手を話し歌ふ人の咽喉にあてがひその振動するリズムを感ぜしめつゝ、他方の手を自分の咽喉にあてゝ

相手の發する音を模倣するやうにすると、こゝでは自他を共同體験的にゆすぶるリズム的振動の波が何よりも問題なのである。ヘレン・ケラーの學習や失聴後のヴェート・ヴェンの悲痛を極める體験なども、かゝる事態に關して證示するところが少なくないであらう。一般に自他相互間のロゴス的理解にはつねに身體的共同體験的律動的體験がその基底にひそんでゐるのである。身體的律動的體験は一切の作用の根源を可能にする *plastisch* な「場」にほかならない。

かゝる見地よりすれば、形態心理學者が知覺作用のみならず記憶の理論すらも所謂「場の理論」として展開せんとするは—— *nutzfalls nutzfalls* に—— 根據をもつてゐるといはれよう。ケーラー等によれば、我々の知覺・記憶・思惟等は腦の「場」においてある一定の力學的傾動性をもつて成立するのである。例へば、我々がある時間の間ある程度の緊張をもつてある種の心的作用をつゞけるとき、その終了後もしばらくはその「殘效」又は緊張状態がつゞき、直ぐと他の方向に「頭を向ける」ことは出来ない。その故に一定の意味内容の殘效或ひは所謂把持はその「場」の起伏が擾亂せられざるときによく行

はれるのである。ある意味内容を覺えた後、他の精神活動に従事せず直ちに眠つた場合の方が然らざる場合よりもその内容の把持はよく行はれる。忘却は意識の場を擾亂する他の内容の登場による干渉抑制によつて助長せられる。所謂「殘效の干渉」の現象である。かくて記憶の理論も「場の理論」として成立するといはれるのである。意識は一方では自己維持的傾向性をもつと共に、他方ではパスカルの頭腦をも嘆かしめる如き動搖性を併せもつ力學的彈性的場面において成立する。意識作用は可塑的全機性的地盤において成立する。こゝに形態心理學者は知覺や記憶等の過程の電流布置などを假定し、知覺等の生理學的基礎を「腦の力學」に求めるであらう。

しかしもとより知覺乃至廣く意識の理論は單なる「腦の場の力學」をもつてつくされるものではない。こゝでは「腦」のみ、の場ではなく、身體全體を貫く根源的共同體験的律動的全機性としての「場」の力學むしろ *plastisch* が知覺論を具體的に可能にするといはねばならぬ。腦の「場」はむしろかゝる全身そのものを貫く全機性的中樞的反映でありその函數といはれるであらう。腦は器官としては頭部に局在するが、機能的にはその神經支配に



おいて全身の各部と相即の一圓統一を成してゐる。神経作用・内分泌作用其他の機能の相即的全機性の中樞的空間的表現が所謂脳にほかならない。もとより脳における諸神経中樞の局所限定説は解剖學的生理學的に承認せられるところであるが、後述する如く、本質的には器官よりも機能が先である。一定の性質をもつた機能が一定の方向をとつてはたらく軌跡が所謂器官の存在を可能にするのである。實に脳は身體を貫く律動的彈性的全機性の集約的なる空間的表現にすぎない。まさに神經學者等が「脳は全身にある」といふ所以であらう。脳の「場」は身體全體の「場」の上部建築にすぎない。所謂知覺論も脳の「場」においてでなく、律動的全機性として特色付けられる身體全體の「場」において展開せらるべきである。かゝる全體の場面において各知覺は共通感覺的相即性乃至共同様態的全體性そのものにおいて成立する。かかる身體全體の「場」は——再三のべた如く——律動的性格をふくんでゐるから、知覺作用その他一切の人間の精神作用は時間的リズムにおいて成立する。従つて人間の精神現象はすべて全體の形態性において成立すること、まさに形態心理學者の記述するが如くであらう。何とな

### 身體性の構造

れば時間的に律動とよばれるものは空間的に形態とよばれるからである。リズムは時間形態として部分的偏倚性そのものにおいて自己超越的に一圓全體性を宿し表現してゐる。實にリズム的一圓性につらぬかれた人間の身體はその如何なる部分も全體そのものの一環をなしてゐるのである。今や我々は身體を根本的に貫いてゐる律動的全機性の性格を機能的相即性として解明すべきであらう。そこには生物の海洋的系譜を示す「動的恒常性」が更に新たなる姿において現はれるであらう。

## 九

上來我々は身體を貫く基本的性格を律動的全機性として理解し來つたのであるが、その律動性なるものは音波の干渉の如き單なる「場」の力動性にとゞまるものではない。身體の基本性格は單に力動的といふよりもむしろ可塑的 (Plastisch) である。それは柔軟なる動的平衡を現するものとして單に流動的でなくむしろ形態的である。そこには明確なる分節性が實現せられるのである。分節的であること自體において一圓全體性であることが、まさしく律動的全機性の本質を形成してゐるのである。

すなはち對立的分節規定そのものにおいて成立する一圓統一性<sup>統一性</sup>がまさに問題なのである。律動的全機性とは具體的には分化と統一との相互關係の一圓性<sup>一圓性</sup>そのものにほかならない。律動的全機性が高度化するところには、必然に分化そのものうちに深き一圓統一性が實現せられてゐるといへるであらう。單調なる音は深く豊かなリズムを成すことはできない。下級生物はその體制は單純である。ここでは同一器官が多くの作用を代理的に替み、器官の分化は進んでゐない。高等動物になるにつれて、器官の分化は進み、特定の器官に特定の作用が屬してゐる。ことに人間の身體にいたれば、ある生物學者は一〇七の器官又は器官部分を數へ上げてゐるくらゐであるが、かく器官が分化し各部分が獨立しそれぞれ獨自の作用を替むにつれて、それと同時に全體生命機能の有機的目的論的統一性は高まるのである。すなはち人體は極度の分化のうちに現成する、交響樂的全一體なのである。人體の根本性格は部分の獨立そのものうちに高められた相關性にほかならない。人體の如く器官の分化せるはなくまたその機能の相依るものもないであらう。形態的に極度に分化せる器官はその機能において何一つ相互に關係せ

ざるなきまでに精妙なる統一性を實現してゐる。人體においては、如何なる部分も中心を成しつゝしかも同時に全體そのものに屬してゐる。このことはある部分の故障が全體そのものの「場」の相好を變へることよりするも明かである。ある部分の機能障害は多くの場合痛覺體驗の形をとつてその波動を全身に「放射」ausstrahlenするのである。こゝにはまざれもなく律動的全體性が身體器官の相即性において證示せられる。人體においては如何なる器官も機能的に相互につらなりつゝ隨所に中心をもつ全機性そのものに達してゐる。

人體においてはいかなる器官も機能もその極度の分化において相即的に一圓統一性を現成してゐる。血液は心臟の機能によりて全身をめぐる行くのであるが、その心臟全體を養ふものはまた血液にほかならない。人體生命においてはあらゆる部分器官乃至機能はそれぞれその獨自の性格において相互につながらり相互に原因を成しつゝ一つの圓環的共同體を成してゐる。卓越せる生理學者クロード・ベルナールは次の如く語るであらう、「生命をば己の尾を嚙んでゐる蛇で出来てゐる輪に喩へた古代の寓意畫があるが、これは實に真相を穿つてゐると言つて

よい。實際複雑なる生物に於ては、生命の有機體は確かに閉ぢたる輪を作つてゐる。併しながら、たとへそれは順次に生命循環の完成に於て、續してゐるとは云ふもの、あらゆる生命現象が同一程度の重要さを有つてゐるのではないと意味に於て、この環は頭と尾をもつてゐると言つて差支なからう。」(實驗醫學序説 邦譯一五〇頁)人體はまさに「環」そのものにおいて成立してゐる。そこでは、全體が一圓統一を成すが故に、部分がます／＼個性的機能を發揮し、部分が獨自の機能において相互補足的なるが故に、全體の統一がより精妙となり且つ高度化せられるのである。かゝる人體の生理學的圓環性こそはまさしく人間をして外界との彈性的平衡に住せしめるものにほかならない。かゝる性質をもつ人體の相互補足的な機性を實現する重要組織は、神経系の作用ならびにそれと深き關係をもつ化學的分泌作用であらう。更には人は同化作用と異化作用の調整に關係する酵素をも、全身の調整因子としてあげるでもあらうが、我々は先づ自律神経系の作用を取上げるであらう。ここにも相對立する拮抗性におゝりリズム的に人體の全機能的統一を成立せしめる動的恒常性が鮮かに觀取せられるのである。

### 身體性の構造

## 一〇

自律神経系に屬する交感神経系と副交感神経系とは、同一なる器官又は内分泌作用に關して拮抗的に作用するリズム性において全身の生理的統一を自動的に成立せしめる。この點で我々の注目をひくものはキャノン等の提唱する説である。彼によれば、自律神経系のうち、(一)頭部のもの(副交感神経)は消化吸収等生體のエネルギーの轉換攝取及び貯藏に關係し、(二)薦骨部のものは直腸膀胱等において「周期的に充たされるもの」すなはち個體の活動を妨げる老廢物又は過剩物を排出すると共に、より大なる慰樂につかへ性にかゝはるものとして「種族の連続性」關係し、(三)胸腰椎部のもの(交感神経)は——彼は之を體液にアドレナリンを注射せると同一作用を現はすところよりして the sympathico-adrenal system と稱してゐる——非常時に際して貯藏エネルギーの動員にあたるものとして主として個體の存続に關係すると考へてゐる (Cannon, Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear and Rage, p. 27, 34, 272 etc., The Wisdom of the Body p. 245, 247 etc.) 略言すれば、脊髄の上下部の

自律神経は人體の「恒常的狀態を確保」せんとし、中部のそれは「内的環境の重大なる變化の防止に急速且つ直截に發動する」ものなり (The W. of the B. p. 249) リズム的拮抗性においてはたらく兩者は常時非常時を一貫して人體の動的恒常性を彈性豊かに實現してゐるのである。

中部の交感神経系は、鬭争逃亡等の如く運動量大なる筋肉活動において必要なるエネルギーを動員し、非常時に内的平衡を破るものに對處する應急作用に任ずるものである。こゝには恐怖憤怒苦痛等の如き強き情緒に對應する身體的變化が見られ、心身ともに緊急事態に對してそなへるのである。瞳孔擴大・呼吸(酸素供給)の急速化・内臓部(消化器官等)への血行停止・心臟鼓動並びに動脈血行の促進・動脈壓の加重等により運動筋肉部への急速なる血液動員・肝臓等に貯へられた血糖、脂肪等の動員。此等の作用により積極的に急に應ずる交感神経は同時にまた出血の際の凝血作用の急速化及び周邊血管の收縮・急激なる體溫昇降の阻止・血液中の老廢物排去等の機能を發揮し、激變によりて危くされる「血液内の酸・鹽基の關係の平衡」を維持するといはれてゐる。か

く新陳代謝の急速化によりて非常時に對處する交感神経と神経支配上精密に拮抗するものは、平常時にエネルギー蓄積にあたる副交感神経にほかならぬ。この兩系統の神経支配の拮抗作用につきては、上掲の書、吳建氏の「自律神経系」等参照)

かく相互に拮抗的にはたらく自律神経系はそれぞれの器官を支配しことに精巧なる内分泌の相互拮抗性を通じて全身機能を自動的に彈性的平衡に住せしめ、こゝに「内的環境」の恒常性が確保せられるのである。ことに自律神経支配による内分泌現象は「對立において驚嘆すべき諧調」を呈してゐる。こゝには對立そのものを通じての驚くべき律動的平衡性が常非常一貫的に確保せられるのである。自律神経系の拮抗支配による内分泌の相互抑制的なる「調和的平衡」は、全身の「體液」の動的恒常性を可能にする。人體の顯著なる彈性的安定性は實に「内的環境又は體液媒質 fluid matrix の恒常性」に依存するものにほかならない。對立そのものを通じて動的恒常性乃至彈性的平衡の確保するところに、體液媒質の本質がある。かゝる體液こそは神経系とならんで極度に分化せる諸器官の機能を一圓統一にもたらず媒質にほかな

らない。體液こそあらゆる特殊器官を一つに結ぶ動的媒質乃至“common stream”として、國家社會における「貨幣」等に比較せられるものにほかならない。

## 一

人體の内的環境の彈性的恒常性を確保するものとして體液の性格は極めて注目すべきものである。相拮抗する神經支配及び内分泌作用は相互補足的に關聯しつゝ體液の統一において内的環境のリズムの平衡を可能し、こゝに人體の柔軟にして彈性的なる恒常性が保證せられる。器官や機能の極度の分化が同時に動的媒質によりて緊密なる相互依存の一圓統一にもたらされよく内的環境の動的安定性が成立するところに、身體性の本質的構造が見られる。人體構造の本質は動的安定性であり彈性的平衡性である。人體の組成の主要成分の大部分は極めて崩壊しやすく生化學的に頗る不安定なるものである。それと共に人體の機能もまた——瞬時の呼吸停止血行阻止もその全生存を危くするが如く——繊細にして不安定なるものである。かく組成・機能の兩面に互りて不安定を極める人體は、同時にその成素と機能との水ももらさぬ相互

## 身體性の構造

聯關において精妙なる彈性的安定性を現成してゐるのである。人體の律動的全機性はその一面においてその平衡が直ちに破れる鋭敏なる興奮性であると共に、他の一面においてかゝる平衡擾亂に對抗する契機の出現の速さにおいて他に多く類を見ざる彈力性自體なのである。すなはち極めて容易に自己平衡より逸脱する變容性が直ちに自己平衡に歸る彈力性そのものにおいて成立してゐるのである。容易に毒素の介入を許す人體においてはまた同時に毒素に對抗する抗毒素が自動的にあはれる。一般に人間の身體には諸機能の「調和的平衡」を亂すものに對抗する代償的調整活動が自動的にはたしてゐる。かゝる自己保存的根源的生命力をモナユウは *synthesis* 又は *conscience biologique* と名付けてゐる。*synthesis* はつねに身體の諸機能を「調和的平衡」にもたらさんとする彈性的自動的生命力にほかならない。(C. v. Monakow et R. Mourgue, *Introduction biologique à l'étude de la neurologie et de la psychopathologie* 1928, p. 107, 109 etc.) これはモナユウ自身も認めるが如く、ヒポクラテスに發する *vis medicatrix naturae* の系譜につらなるものである。この點においてキャノン

もモナコウと共に同一系譜にたらなりつゝ人體の本質構造を追求してゐるといはれよう。上述の如くキャンノンは「内的環境の恒常性乃至動的平衡性」を追求して、これに Homeostasis の名稱を與へこれを vis metabatrix nature の近代的解釋と考へてゐる。(The Wisdom of the Body, p. 20, 226 etc.) その立場の相違にもかゝらず、モナコウの syneidesis とキャンノンの homeostasis とは系譜上内容上相會するものをもつてゐる。こゝにはさづかれも固定不動の同一状態でなく、動そのものうちに恒常性を保つ弾性的全機性が身體生命の本質構造としてとらへられてゐるのである。

かゝる「自己調整的自己救治的」生命力の高度化こそ動物進化そのものをあらはすといはれるのである。すなはちかゝる性能は高等脊椎動物になるほど發達してゐる。その體表よりの水分蒸發を防ぐ機構をもたぬ蛙は體溫調整の能力を缺く故に、その活動範圍は水邊に限られてゐる。それに對し哺乳類は自己のうちに體溫調節機構もち體溫に關して homeostasis を得てゐるが故に、その活動範圍は地域的特殊性を超えて廣範圍に及んでゐる。その他身體の諸機能は悉く内的環境の homeostasis の實現

に關係せざるはない。身體は至るところ鋭敏なる反應において自性を維持する動的恒常性そのものに住してゐる。かゝる動的恒常性は實に身體の本質を成すと共に意識性そのものの基底を成すのである。水分の缺乏といふ身體の平衡の問題は同時に渴きの意識そのものに通じてゐる。過度の勞働により體內平衡が脅かされるとき、疲労感乃至疲勞意識があらはれる。キャンノンが「苦痛・饑渴・恐怖・憤怒における身體的變化」を追求するとき、我々は身體的内的環境の動的恒常性が如何に深く「意識の問題」に關係するかを思はざるを得ないのである。またモナコウがあらゆる生物の本能的形成力として syneidesis の自己平衡性をとらへて之を conscience biologique と稱し、人間固有の noûménétares (又は本來の意識としての conscience morale) の基底となすことも、また身體的生命の弾性的平衡性が如何に深く意識につながるかを思はせるのである。身體の homeostasis 又は syneidesis は自動的無意識的でありながら、直ちに意識的主體面に深く通じてゐるのである。身體の構造本質としての動的恒常性乃至弾性的平衡性は「意識」の身體的基底そのものにほかならない。このことは更に後に觸れられ

るであらう。

## 一一一

外的刺激に對する彈性的自己平衡性は所謂 *emollients* 又は内的環境の *homeostasis* として全身を自動的に調整してゐる。こゝには全身を支配する靈妙なる生理學的統一のみならず意識そのものの根柢を成す時間的中心性が生きてゐるのである。人體機能の統一には意識の根が深くおろされてゐる。一般に高次の心的作用の地盤を成すものは内外の彈性的統一を可能にする内的環境の *homeostasis* である。キヤノンは血液に關しては水分・鹽分・糖分・蛋白質・脂肪・カルシウム・中和性等の *homeostasis*、體溫の *homeostasis*、酸素供給の *homeostasis* 等を詳述し、人體機能の「精妙さ」を嘆ずるに辭を惜んでゐない。勿論上に列擧せられたるものは相互につながりつゝ身體機能全體において唯一の *homeostasis* を現成せしめてゐることはいふまでもない。身體においては何一つ相互につながらぬはない。一切の器官と機能とは體液的媒質の動的恒常性において一味となりつゝ唯一のシンプオニイを成してゐる。すべては唯一の生命力を維持

する方向にはたらいてゐる。こゝには生物體における全體的合目的性がまぎれもなく我々の眼をうつてくるのである。今日の醫學界の謎と稱せられる悪性癌腫の如き所謂自律性をもつ例外的異分子をしばらく視野の外に飛ばし、身體のあらゆる部分は合目的性の統一のもとにあるといへるであらう。

上述せる如く、人體の内的環境の恒常性は、極度に不安定なる化學的物質と極度に分化せる器官部分との相互關的協同性のうちに現成するのである。かゝる *homeostasis* は所謂種の進化と共に、又個體としてはその發育成長と共に、その微妙精巧なる本質的性能を發揮するにいたるのである。こゝに神経系や内分泌作用の發達によつてより複雑となりより高き性能を發揮する *homeostasis* のもつ進化論的高次性がある。極度の不安定性と分化そのものうちに現成する複雑精妙なる内的環境の全體的彈性的恒常性の故に、高等動物にいたれば、ある程度以上の器官喪失においては、その再生は不可能である。下級生物では比較的に再生力が強いが、高等動物には殆んど全面的に再生力を缺いてゐる。かく内的環境の複雑性は容易に喪失部分の再生を許さぬが、その彈性

的全機性はその代り高度の代償能力を賦與するのである。高等動物は再生力の代りに代償力をもつてゐる。かゝる代償能力は腎臓その他における如く交互にはたらく相稱器官の存在によりて著しく助けられるが、單一器官の喪失の場合にもある程度まではたらく以上、代償性はあらゆる機能を一圓統一する生體の彈性的全機性そのものに深く關係するといはねばならない。代償性は全機性そのものの問題である。視力を奪はれたものが觸覺聽覺等において代償的にすぐれることは、人の知る一般的事實であるが、その他感性知覺相互間の代償性ことに腦の機能の代償性は人を驚かしめるものがある。小腦を除去すると暫時運動障害がおこるが、間もなく正常運動が出来るやうになる。なほ大脳兩半球のうちその一つを失ふも、日常生活に支障なきにいたることなども人の知るところであらう。かゝる腦の代償機能ももとより腦部そのものみにて可能ではないといへよう。既述の如く、腦はその根を全身におろし、又全身に神経支配の波動を及ぼしてゐる。全身を生かしてゐるものは自律神経によりて自動的に調整せられてゐる内的環境乃至體液媒質の動的恒常性にほかならない。ある論者が説く如く、自律神経的

身體的全機性が先きで、大脳の意識的調整はその副次的抑制統一とさへいはれるのである。意識生命もまた身體全體の *homeostasis* に深くその根をおろしてゐるのである。一腦は身體にあるといはれるが如く、精神はその自律神経的基底に深くつらなつてゐる。ヒポクラテス以前のギリシヤ人が腹部に、又古來我國の人々か所謂「肚」に、魂の座を認めたのは、交感神経の主要が横隔膜の下部に存在するといふ事態の素朴端的なる把握にほかならなかつたといへよう。生理學的にもいはゆる心身一如の事實が裏書きられるのである。從來器質的でなく機能的であるとせられたある種の精神病も、自律神経的内分泌的障害にその身體的基底をもつといはれてゐる。從來所謂精神に屬せられた一切の屬性は内分泌においてその身體的對應を見出すとさへ、生理學者は主張してゐる。かゝる事態はすべて腦の機能が如何に深く自律神経的機體的全機性につながることを物語るといはねばならない。かく考へれば、腦の代償性もその他の器官のそれと同様に身體全體の自律神経的調整の *homeostasis* との特殊なる關係なしには不可能であるといへるであらう。

全身の器官機能を一圓化する内的環境の恒常性はあら



ゆる人間活動の根柢であり源泉である。それはあらゆる高次の活動の培養基を成すと共に、單なる生存に必須なる條件をこえて或る程度の餘裕をたたへてゐる。内的環境の homeostasis にはキャンソンの所謂 a wide margin of safety が認められるのである。人體には非常時に動員すべき餘分の營養分が肝臓其他に貯へられてゐる。血液・體温その他につきても最低生活線を超えるものが保せられてゐる。かゝる様相において生命の彈性的全機性が成立してゐるが故に、ある種の器官喪失乃至機能障害の代償も助長せられるのである。

### 一三三

内的環境乃至體液媒質の動的恒常性はかくて a wide margin of safety をたたへつつ高次のあらゆる活動を可能にする。人間の存在とその活動を保證するものは實に身體生命の homeostasis である。それはまさに生命の根である。單なる生活の必須條件を無意識的自律性においてしかも十全に確保して、人間を高次の活動に向はしめるものが、自律神経の支配の下に立つ身體的 homeostasis にほかならなく。もし人間にかゝるものがなくして、

### 身體性の構造

我々が血行消化呼吸等の調整を一々意識的反省的に行はねばならなかつたとしたならば、人間は身體的生存のみを全くするためにまさに奔命につかれ、つねに身體的平衡を喪失し病氣に襲はれ、何一つ高次の活動は出來ないであらう。人間の一切の營爲は身體的生命的自動的平衡性の上のみ可能である。その限り、身體的本能的生命の確保こそ何より重大であるといへるであらう。自然はこの點であらゆる配慮をつくしてゐるかの如くである。何よりも生存の最低條件そのものの確保が問題である。

この點に關して生命は本能的に自衛的である。生命は自衛作用そのものである。この見地よりすれば、一切の健全なる生理學的機能のみならず、違和病氣すらも身體の平衡への動向そのものにほかならない。ある種の論者によれば、より狭き範圍内に後退して最後の一線を守らんとする一種の自衛作用が病氣にほかならない。かゝる生命の合目的見地よりして病氣ことに精神病を理解せんとするものに、上述のモナコウ等がある。

vis medicatrix naturae をその立場より解釋して之を synaesthesia と名付けたモナコウに依れば、ヒステリー・精神神経症・昏睡 Coma 等は單なる違和ではなくて、

それ自身 *synoïdesis* の作用であり一種の合目的的自衛作用（彼の所謂 *oklisis*）にほかならない。すなはち高低兩層にわたつて本能的知性的生活をなすにたえざるが如き窮境においては、生命は多量の神經エネルギーを要する高次の意識層を切り捨て、退いて生存に必須なる本能的基底層を確保せんとするといふのである。精神病者は高次の知性面の犠牲において身體的原始生命そのものを全くするのである。その限り精神病は戦線の縮少による最後の一線の死守を意味する。ことに昏睡の如きは短時間の意識喪失と運動停止によりて自律的生命機構の更新の恢復をはかるものとして好個の例を成すといはれる。かくて精神障害も生命の自衛作用としてそれ自身 *synoïdesis* の性格を荷しつゝあると考へられる。（*op. cit.* p. 256, 259, 261, etc.）もとよりかゝる解釋をもつて精神病全體を説明するものとなすことは出来ぬであらうが、かゝる合目的的解釋はいふまでもなく生命そのものの本質としての自己平衡的傾向乃至内的環境の弾性的恒常性に深くつながつてゐると考へられる。

#### 一四

最も不安定なる要素及び複雑多様な機能そのものの相互依存のうちに成立する動的恒常性こそは、人體の本質構造にほかならない。時としては病氣自體においてすら合目的性を示す如き弾性的平衡性こそは、まさしく身體性の本質に屬してゐる。外界より敏感に影響をうける受衝性自體のうちに人體はその動的安定性を持し自性を保つてゐる。哲學的先入見を混へざる生理學的立場において次の如く語られることは、示唆するところが少くないであらう。「外から見ると矛盾であるが、生體は興奮し外的刺激に従つて自己の在り方を變へ刺激への反應を調整し得る時にのみその安定性を保つのである。ある意味で、自己の在り方を變へ得るが故に、生體は安定なのである。——軽度の不安定性は生體の眞の安定性にとつてなくてはならぬ條件であることゝする。」（Charles Fichter）生體の本質構造としてのかゝる動的安定性乃至可塑的恒常性は脊椎動物において次第に高度化せられ、人間にいたりてその頂點に達してゐる。人體においては、極度の不安定性自體の裡に高度の弾性的恒常性が實現せられるところ、所謂内的環境の *homeostasis* が現成してゐるのである。こゝにはあらゆる器官が機能的相互依存

性において所謂 *synclisis* を成してゐる。こゝにおいて是多即一であり、器官即機能の一圓統一があるのみである。かゝる一即多の統一として、人體は根源的に律動的・全機性・彈性的平衡性・動的恒常性として特色付けられる。外界の刺激をうけて自己を變容すること自體のうち自性を維持する動的恒常性として特色付けられる人體の「場」においては、無數の刺激は全體そのものゝ立場から種々なる意味を與へられる。今や人體は存在における意味賦與の中心といふ性格を帯びてあらはれるのである。

柔軟なる可塑的全體性に住する人體には種々なる「傳導路」を宿し、外的刺激より反應運動への道は機械的な一筋道でなくて種々なる可能的方向を含んでゐる。外的刺激が一切を決するのであるなれば、そこには内外を通じて機械的必然的運動の一筋道があるのみであらう。同時に所謂內的態度のみが一切を決定するのであるならば、人間は感性知覺にまつはる重さを意識せぬであらう。單なる機械的運動でもなく單なる內面的作用でもなく、柔軟なる可塑的全體性において刺激―反應過程に種々なる意味を與へ種々なる方向を與へるところに、人間の知覺

―運動作用の力動的性質がある。外的刺激と反應との恒常假定を斥ける形態心理學者がその兩者の中間に「最も大切なもの」として「直接に觀察できぬやうな生理學的過程」の力學的場を説くのは、偶然ではない。かゝる場において内外諸力の干涉現象として知覺形態が全體的相好をとつて形成せられるのである。つねに動的恒常性に住する人體は外界の多様な刺激に鋭敏に感應する「檢波器」そのものであり、同一刺激に對して種々なる意味をあたへつゝ種々なる可能的方向において反應する主體的中心である。かくて人體はアリストテレス的に云へばまさしく「中の媒體」なのである。

アリストテレスに依れば、感官に直接接觸した對象は知覺せられない、また植物の如く質料そのものに直接はたかられるものにも感覺を語ることは出来ない。すなはち質料からいつて對象と直接に連続するところには、感覺作用は成立しないのである。従つて感官と溫冷の度を等しうするものも知覺せられない。また極度に熱きものや冷いものも知覺の圏外にあるから、知覺せられるものは寒暑の兩極の間にあつて「中」の性格をもつたものである。知覺するものは顯勢的に黒でも白でもなくて可能

的にその何れにもなるやうな「中」に住してゐるものもある。黒と白の何れにも住してゐないから、「中」に立つて兩者を判別的に知覺し得るのである。まさに知覺は客體と直接に連續せずしてしかもその兩極規定に通ずる「中」において成立する。しかるにアリストテレスによればあらゆる感覺の中もつとも根本的位置をしめるものは觸覺にほかならない。その觸覺の媒質をなすものは「肉」であり「身體」である。身體は觸覺にあたへられた媒質であり、多様な感覺はそれを介してはたらくのである。(以上 De anima B. 10-12) あらゆる感覺の原型

を成す觸覺を媒介する身體そのものは、知覺の知覺性に地平を開く「中の媒質」そのものであるといへよう。かくして冷熱等の兩極規定の間に動的恒常性を持つる身體の本質構造は兩極の「中」そのものにおいて成立する知覺性に深くつながつてゐるのである。冷にも通じ熱にも通じしかもその何れにも止まらずしてその「中」において動的恒常性を維持するものが身體の本質を成す以上、身體性は根源的知覺性そのものに地平を開く「中の媒質」たる意味をもつてゐる。人體はその彈性的動的恒常性の故に種々なる外的刺戟にのぞむに一定の比例性をもつて

する。客觀的物理學的には非常な強度の差をもつものも人體の可塑的平衡性の場においてはアナロギヤ的なる「中」において「意識」せられる。かゝる動的恒常性の「中」に即して知覺性そのものが可能となる故に、各知覺はそれぞれの相對的規定を取出す「分析器」としてはたらくのである。冷にもあらず熱にもあらずる「中」の動的恒常性に住するが故に、冷と熱との相對極の間のあらゆるものに赴き得るのである。まさに動的恒常性は生物生存に必須なる基底を成すと共にひろく意識性そのものゝ地平をなすのである。

生物體がその内的環境の動的恒常性において「中の媒質」たる意味をより多く實現するにつれて、生物體はより廣き範圍に互る順應力を發揮し、外界の變化に對するより完全なる獨立性を示すに至るのであるが、その際の體制はより複雑となり、従てその欲望もより多様となり、同時にまたその知覺更には知能も相關的に高度の發達をとげる。すでに主意主義者ショーペンハワーが體制の複雑化と欲望の多樣化と知能の進化との三者併行を語つてゐるのであるが(Die Welt als W. n. V. II. 2 19. sänftliche Werke 3. S. 229) 近くはベルグソンがその



如く、人體は器官的に極度の分化を遂げ、各器官部分はそれぞれ独自の機能を發揮してゐるが、かゝる器官上の分化はまさしく全身の機能的同一性をそのものを實現してゐるのである。器官はいはゞ一定の機能の軌跡乃至結晶性にほかならない。器官の本質態はむしろ機能性である。かつてゲーテ更にはショーペンハーワー、シュレーゲル、ヘーゲル等において、建築は「凝結せる音楽」乃至「結晶せる音楽」と稱せられたが、かゝる消息は人體にも見られる。有機體においては本質的には時間的機能的統一が先で空間的器官形態は後である。水が流れるところに川の形があらはれる如く、機能の軌跡をして身體器官は可能となるのである。全體の機能の停止と同時に身體 Leib は屍體 Leiche となるのである。アリストテレスは切るといふ能力なきものは斧ではない、斧のロゴスは切るといふはたつきにあると語つたが、まさに全體の機能そのものが身體のロゴスにほかならなく。機能を「成れるもの」の相の下に見るとき、所謂身體器官が語られるのである。身體の根柢を成すものはロゴス的な形成原理にほかならない。アリストテレスが明かに語る如く精神は身體の形成原理でありロゴスなのである。器官と

して空間的に客觀化せられるものの根柢には、客觀せられざる全體的時間的統一がはたらいてゐる。ショーペンハーワーが身體を「意志の客觀化」としてとらへることは深き眞理にふれてゐるといはねばならない。形の根柢には客體化を許さぬ主體的エイダスの原理が *nunc stans* にはたらいてゐるのである。變容自體のうちに主體的統一を宿す動的恒常性そのものこそ、たえず現在に住する「生命」にほかならない。所謂「生命」そのものがすでに「波瀾縱横なれども心水湛然」たる趣を深く宿してゐるのである。内的環境の動的恒常性を主體的現在性において維持する生命のロゴスのイデアの規定は、客體的空間的には所謂種の同一性にほかならない。現在の内的環境を貫いてゐる動的恒常性は過去と未來の種の恒常性の歴史に深くつながつてゐる。客體化せられざる現在の *punctum saliens* は過去と將來の生命そのものを貫く *potens* として三世一貫の生命の—文字通りに—*syn aeternis* である。このことは比較的に可變的な要素を含むゲンがそれにもかゝらず常に種の同一性の根柢を成すことを想起せしめる。身體の動的恒常性そのものうちに現成するエイダスの不可分の統一こそは、所謂種の限定に

ほかならない。これによりて我々の身體は自己をこえて祖先につらなり異性につながり子孫に結ばれつゝ社會的民族的統一の一中心となるのである。時間的個體的に内的環境の動的恒常性といはれるものは、空間的社會的に種的統一性といはれるものにほかならない。かくて身體的種的限定には深くイデア的なるものがひそむのである。アリストテレスが語る如く、生殖作用自體において生物は「永遠なるもの、神的なるもの」に與るのである。ここには、「ウーシヤがすでに存在する」の語がある。(Vgl. *De anima* B. 4) その内部において生命の動的恒常性を保つ人間は、つねに人間に對し人間につながりつゝ種的同一性に生きてゐるのである。人と人とはイデアにおいて相つながつてゐる。こゝには人體のもつ被創造の深底があるのである。かゝる深底に人々は立つが故にロゴスをもつて相つながる主體ともなるのである。人間は根源的形而上學的に社會的存在である。人間が化石學的に「社會的動物」として實に悠久なる歴史をもつ事實は、實に人間の形而上學的本質そのものに深くつながつてゐるといはねばならない。内的環境の生理學的恒常性の喪失が個人生命の危機を意味するが如く、社會的環境の喪

### 身體性の構造

失は人間の本質そのものゝ喪失にほかならない。このことは精神病患者の我々に示すところである。人間の社會性は生命が唯一自然環境そのものゝ否定的媒介の中心として個別化的に發祥した事態に深くつながつてゐる。我々の身體のうちに深く入り込んでゐる自然の力を見るとき、また内外の自然的環境を動的恒常性において調節する生命のイデア的規定を凝視するとき、人は生命そのものを貫く種的限定性の深さを思はざるを得ないであらう。我々の生命自體の根柢にはすでにイデア的超越的なるものが存在論的に深くはたらいてゐるのである。

### 一六

かくの如く種的同一性に深くつながる内部環境の本質を成す動的恒常性は、その名稱がすでに示す如くつねに二重規定的である。それは動的であると共に恒常的であり、流動的であると共に可塑的であり、個體的であると共に種的であり、全體적であると共に部分的であり、身體的であると共に精神的である。内的環境としての體液媒介に關して極めて重大なる意味をもつ内分泌現象において一切の「心的なるもの」そのものゝ映像を見んとす

る見解すら存する如く、内的環境の場は身體的物理的であると共に精神的心理的である。こゝには直接的なる心身一如性又は部分と全體との直接的統一が見られるのである。物理的なるものと心理的なるものとの同一根源性を説き更にその現象學的同一性を説いて部分と全體との現象的同次元性を指摘するケーラーによれば、「全體は必然に平衡への方角をもち」現象界は心的なるもの、「直接なる本質表現」にはかならなす。(W. Kohler, Bemerkungen zum Leib-Seele-Problem in: Deutsche Melizische Wochenschrift 50 Jahrgang S. 1269-1270) こゝにケーラーは心身問題を解く鍵を認めようとしてゐる。律動的全機性又は動的恒常性として特色付けられる身體の場においては、現象そのものがすでに全體の有意義的である。そこでは物的身體的なるものは直ちに心的表現的である。かゝる直接の心身一如態においては空間的であると共に時間的であり、器官的であると共に機能的である。かゝる二重規定において、身體的有機的生命自身の中間的性格が明かとなるのである。即ち身體的有機的生命は動的・恒常的の二重性において一方では動性の故に力學的存在乃至 *Dynamismus* の世界に根

をおろすと共に、他方その恒常的主體性の故に高次意識界乃至社會性の世界に直ちに接觸してゐる。かくその動的主體性の相の下に力動的無機界と主體的精神界との兩極の中間に位する有機的生命においては、一方で自然平衡性において自動的であると共に、平衡擾亂性に即して意識的である。キヤノシ等が明かに指摘した如く、非常時においては瞳孔は擴大し呼吸は深くなり血行血壓は高まりアドレニン<sup>※</sup>は副腎より分泌せられ體內環境の平衡が自動反射的にはかられるが、かゝる反射的自律神經支配的調整作用は同時に恐怖憤怒等の情緒として主體の意識面に波紋を描くのである。こゝには内的環境の動的恒常性又は受容的主體性をめぐつて反射的なると共に意識的なる二重規定の相即が見られるのである。

再三のべた如く、人體體液乃至内的環境くらゐ不安定なる組成と機能との裡に現成する動的恒常性を示すものはない。それが複雑であり精妙であるだけ、その平衡は破れやすく外的刺激に對して敏感である。こゝに自律神經的支配によつて反射的自然的に「調和的平衡性」を保つ體液的内的環境が同時にその柔軟なる敏感性に即して自己平衡の破れを「意識」する基底ともなる所以がある。



自然的無意識的に自己平衡を保つ内的環境は、その動的恒常性乃至律動的全機性の故に、直ちに意識的主體的活動の基底を成すのである。かゝる二重規定をもつ精妙な内的環境に住するが故に、人間は一方で「病む」存在として、他方では「意識する」主體として特色づけられるのである。内的環境の柔軟なる動的平衡性の一定限界をこえる自然的生理學的擾亂が「病氣」であり、内的環境の自然的平衡の擾亂に即して「現像」せられるものが意識にほかならない。その全存在の根基を内的環境の動的平衡性に仰ぐ人間は生理的に病む存在であると共にイデア的現在性において意識するロゴスの主體でもあるのである。我々の問題は更にこゝからはじまるであらう。

(一八年八月)

\* これはキャンソンの用法に従ふ。“adrenin” is the natural secretion of the adrenal medulla; “adrenalin” is a commercial extract of the adrenal glands. (The Wisdom of the Body, p. 44)